



# 過日の夜のお戯れ



28冊の夢メモから抜粋

さかいまひろ

## はじめまして

---

読んでいただいてありがとうございます。さかいまひろです。38歳主婦です。

中学生の頃からみた夢をメモする習慣がありました。チラシの裏などの紙や何かにコソコソ書く程度だったものが意外に捨てられず、気が付いたらノートに28冊ほどたまっておりましたので、短編小説風に加筆修正を加えて読みやすくすることにしました。誰かの暇つぶしになる以外に立つようなものでもないのですが、せっかく長く続いた習慣なのでまとめることで自分自身を褒める材料にしようと思いました。お付き合いいただけたことに感謝します。

## 28冊の夢メモから

<http://p.booklog.jp/book/72087>

著者：さかいまひろ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/sakaimahiro/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/72087>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/72087>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ

## 爺さんの生きる根源

---

今日は男性の方の夢の話を書いてみようか。

私が病院で風呂介助をしたトシオさん（96歳・イタリア人並みナンパ力）の話なんだけれど。面白かったんだ。

トシオさんがある日夢を見た。若くして戦争で死に別れた同胞たちが、三途の川の前で兵隊服に身を包み、トシオさんに向かって敬礼をしていたという。

「俺ばかり生き残ってすみません。お国のために脚一本しか捧げられず、今でも無駄に税金で生きております。恩給もいただいとります。ほなこつ申し訳なかつた。赦してください」

トシオさんは涙をこぼし謝ったそうな。すると、向こう岸にいる兄弟や同胞たちは朗らかに笑ったそうな。

「もうじきお前もこっちにくるとばい。なんでないちよるとか。大の男が情けなか。それよかお前、アレもっとうろ？」

「アレとはなんでしょうか？」

トシオさんが聞くとまた同胞らは朗らかに笑い、

「あれよ」「おふくろの手紙と家族の写真のポケットと反対側に入っとるもんやろ」

「おいはズボンのポケットに入れとったわ」

当時トシオさん達兵隊さんの間で流行った春画や女性ブロマイドの類の事だ。

「お前あれから3回も結婚したんやろ？よろしくやっとうろもん。」

「そうや。そんなんをたくさんもってこい」

「平和な時代の女はさぞかしきれいなんだろうな」

トシオさんは涙をぬぐい、川の向こうのエロ男たちに大声で叫んだそうな。

「ええそりゃあもう。女たちはあなた方が作った平和のおかげで、皆綺麗に着飾り、幸せにやっとうろもん。私達もそんなきれいな女のお蔭で幸せなとです。最近の若いおなごは脚も長くて目も太かし、みんな女優のような化粧ですたい。俺の孫もみんな美人揃いで鼻高々です。世の中にはまあろくでもない女もおりますが、それはどの時代も同じでしょう。女は星の数です」

おおそれは素晴らしい、皆から歓声が上がった。トシオさんはさらに調子に乗って得意げにいったそうな。

「もうち一とばかりまっちょってください。俺が極上の面白い話しばたくさん仕入れてそちらに伺いますから」

おう楽しみにまっちょるぞー、と彼らはトシオさんに向かって手を振ったそうな。

「生涯私も男として現役でがんばります」

そうやってトシオさんはもろ手を挙げてガッツポーズをしたら、深夜のおむつ交換で男性介護士が来て心底がっかりしたそうな。

相変わらずのエロ爺。やっぱりエロは生きる源の一つですわ。入浴介助の時にそういう話をしてくるんだわ。介助をしていた看護師さんも、

「いくつになっても男ってのはそんなもんやね」呆れて笑っていた。

するとトシオさんは真面目な顔して言う。

「俺はそれのために生きとったようなもんやからね。女がわらっとる世界が一番素晴らしい。あの戦争のさなかでさえ、お袋や姉が笑った一瞬は花が咲いたようにその場が華やかで幸せになったし、一人目の嫁との見合いを決めたのは徴兵前だったけれど、その時も笑った顔が可愛かったから初めてやったけどその日で結婚を決めた。あれから嫁を3人もらったけれど、どの嫁も皆可愛かった。俺みたいな軟弱もんがかえって長生きしてしまったのはそういうところかもしれん」3回結婚できるってすごいですよね。

「まあ時代やろね。戦争行って嫁と別れて、二人目の嫁を貰って死別して。三人目の嫁を看取って今こうやって。」

トシオさんは私ではなく、横で入浴介助をしていた独身の看護師さんの手を握り、

「4人目ももうそこにおるわけたい。俺恩給もっちゃるよ？90歳やからもうすぐ死ぬけどよかったら。」

相変わらず手が早いエロ爺。

「はいはい。もうお風呂終わらしましょうね。少し長すぎましたね。孫さんがお見舞いに来ているそうですよ」

看護師さんは慣れた様子で切り上げる。

「もう少し時間があればなあ。ひいひい幸せにしてやったのになあ。」

トシオさんも笑い、通販カタログで選んで買った藍色の美しいさっぱりとした作務衣に身を包み、パナマ帽をかぶる。

トシオさんの同胞という人たちは、彼の土産話を楽しみにしているんだろうな。

女が笑える世界は素晴らしい。そういうことをさらりと言える男の心は美しい。

## お土産忘れたらいかんやろが

---

病院に勤めている。年輩の方が多き病棟。入院中のトシエさん（仮名：初孫嬉しい60歳）がお風呂介助をするとき、私に面白い夢の話をしてくれた。面白いから話しますよトシエさん。

トシエさんは夢の中でとうとう天国に召される順番がきていたらしい。

三途の川のほとりで、船が来るのを待っていたそう。対岸には先に旅立ったダンナ様が、いつものように腕を組んで偉そうな顔で、トシエさんをじっと見つめていたらしい。嬉しい半面、トシエさんは「あゝまたあの人とおらないかんかよ」と少しため息をついたらしい。

すると、ダンナ様が何かトシエさんに向かって大声で叫んでいる。両手で箱の形を作りながら何か言っている。

何を言っているのか、口元をよくみてる。すると、ダンナ様は「おみやげ」「まんじゅう」と言っている様子だったそう。

「あんたよ、葬式まんじゅうは生きとるもんだけが食べるもんじゃわい」

トシエさんが大声でダンナ様に言い返した。だがそれを聞くとダンナ様がものすごく怖い顔して、大声で叫んだそう。

「おまえ タダで 天国 来れると おもったんかー お土産忘れたらいかーん とりにかえてこーい」

久しぶりにあったのに、何という言い草だろう。やっぱりうちのダンナはダメな人じゃわ。わかったわい。取りに帰るわ。そういつて後ろを振り返ったら朝が来ていた、というお話だった。

トシエさんはその話を大笑いしながら話してくれた。

「やっぱりうちの亭主はダメなオトコよ。普通そんな風に三途の川で追いつたりしないでしょう？本当にがっかりした。」

その話を聞いたみんなも大笑いしていた。そして職員のミナさん（仮名：ラッキョウ大嫌い36歳）が言う。

「ダンナさんはわざと言ったっちゃが。天国にそんなに急いで来なくていいわい、って言っているのよ。もう少しゆっくりしたらいいわ。そしたらおまんじゅう送る方法、見つかるんじゃないかしら？」

「もういいわよ。私も精いっぱい生きてわ。そろそろ楽がしたいわあ」

トシエさんはシャンプーの泡で耳の後ろを洗いながら言った。

確かに。トシエさん。天国は いずれ行くところでしょうし、よほどいいところらしくて、まだ誰も行って帰ってきた人がいないくらいいいところなんですってね。病気で身体がきついかもしれない。傷みは自分自身しかわからない。私達が代理では受けられないし。天国行ったら終わるんだらうなって。そう思う気持ちは想像できるよ。

でもね。あなたがいないととても淋しいわ。

だからぼちぼちゆっくりしてから、天国に行って欲しいと思っています。

そんなに急ぐ必要はないんですよ。

星になってもダメなあんた。

---

夜勤をした翌日。

早朝お部屋の見回りをした時、患者さまのキクさん（仮名・黒糖大好き91歳）が昨晚見た夢の話をしてくれた。

キクさんの病室に、10年以上前に亡くなったダンナさまが遊びに来たそう。

「あらひさしぶり」

キクさんはとてもうれしく、懐かしい気持ちで迎えたが、ダンナさまは開口一番

「キク、今パチンコで確変はいった。あと5千円貸してくれ。倍にして返す」

っていったんだって。キクさんは心底がっかりしたものの、財布の中から5千円とってダンナ様に渡した。

「天国でもあんたパチンコ屋いきよるとか情けない」

「楽しみはそんな簡単にやめられんわい。もうちょっと待っとれ。」

いそいそと病室を出ていこうとするダンナさまを、キクさんはもう一度呼びとめた。

「ねえあんた。私はこんなに悪い病気になってしまって、もう息子たちにも面倒みてもらっても気の毒だし、私も身体がきついんだよ。あんたばかり楽をしないで、早く私を天国に迎えてちょうだいよ。」

キクさんは泣いた。するとダンナ様が面倒臭そうにキクさんのもとに寄って、

「おまえよお。俺はおまえに金を借りに来たぞ。こんな調子で三途の川の渡し賃が簡単にたまるもんか。もうちょっとして稼いでおまえの分の渡し賃もためちやるわ。タバコももうねえから、買っておけよ。」

そういいながら、タバコの袋をクシャリと握りつぶしてたって。

そのときは、会えてうれしかったけど、「もうこの人本当にダメじゃわ」って。

本当に呆れたけど、あまりにもダンナ様らしくて最後は笑いがながら目が覚めたそう。

「本当にうちのダンナはバカタレじゃ。あれじゃ天国にしばらくいけんわ。死んだぐらいじゃ性分は何も治らんね。私ももうしばらく天国いけんわ。だからこれからもよろしくね。いつも悪いわね。」

キクさんは私にそう言って頭を下げ、私の手をとって握る。キクさんも大変だ。

辛いだろうけれど、キクさんさえよければもう少しここにいてくださいよ。キクさんは呆れたかもしれないけれど、私はダンナ様が昨晚、キクさんを天国に迎えに来たんじゃないってことに少しほっとしている部分もあります。

キクさんはいつかなくなるでしょう。でもそれでも、いなくなったらと思うと、私はとても淋しいです。家の事や治療や病気の痛み、体の衰えとか思うところがたくさんあるのでしょね。

それでも私達スタッフにできることがあったら教えてくださいよ。一緒に、なんとか今日も1日豊かにすごしていきませんか。

そんな風なことを思った。しかし、思っていることの半分もいえなかった。

キクさんが握ってくる手を離さずやさしく握り、  
「こちらこそよろしくお願いします」と頭を下げるのが今の私の精一杯だ。



## 男になっても煩惱たっぷり

今日みたいなばかりと晴れた日はいいよね。なにをするわけじゃなくて、おにぎり持ってどっか人の少ないさあ、景色のええところについてなあ。お茶と一緒に食べて、終わったらごろりと車中で昼寝でもしたいなあ。うん。キミと一緒にやったらもう、どこでもええけど。ごろごろがええなあ。そのあとどっか遊びにいこ。

夢の中でそう言ったら、軽やかな女性の笑い声がした。

声の主は蒼○優ちゃんのようなナチュラルビューティーな女子。私の横でニコニコしてくれていた。夢の中の私は男性で、優ちゃんとイチャイチャデートを楽しんでいるらしい。

「いつもそればっかじゃん。雨が降ったらさあ、こんな雨の日は雨音聞きながら…。っていうし、晴れたら晴れたで今日みたいなこと言うし。曇りの日でも、まあせっかくの休みできたんやし、っていう。」

よくわかってるじゃないの。わかってるねえーさすがやないか。まあ要はいちゃいちゃしたいっつゅーことよ。あ、でもまあこんな奴つまらんよね。

「つまんないよお！どんだけ休みたいんだよー！あたしとも遊んでよお！！」

そういうと笑いながら私の腕につかまってくる。甘くさわやかな柔軟剤の香りが、ふわりと香ってきた。ふさふさの髪の毛が私の視線の下にある。おおかわいいなあ、かわいいなあ。めちゃめちゃ遊んだるよ。もうおにぎりとか食べてええ、もう優ちゃんのええ事なんでもしたる！優ちゃんの頭をなでてわさわさしてみる。

夢の中でせっかく男になっているのに、エロ猛々しい男になっているようだ。若干幻滅する。

「ね、今さ、何でもやるっていったよね??」

小悪魔の瞳がわたしを下から見上げた。

一瞬ちょっとまずかったかなあと思う反面、あまりのかわいらしさに何も言えなくなる。

ああ今俺何でもするって言ったね。ああ言っちゃったわあ。でも俺に何ができると思ってるの？カネないしコネないし。仕事もウ○ことりやぞ。

「大丈夫。人間だったらできるから。あたしのために、ね？」

し、仕方ないなあ優ちゃんの頼みや。やるよ、やったるぞー！

「ありがとー。大好き」

優ちゃんの目の奥がキラリと光った気がした。ああ俺これやってもうたかもしれん。

不相応なかわいい女の子に騙されてもうたかも。心の中で呟いていた。

場面は反転。

私は丸裸にされ、後手を拘束された状態でトボトボ歩かされていた。

私以外にも数名の男性がいて、皆冴えない表情をしている。拘束具を牽引し私達を先導するのは黒服の男。あの有名ギャンブル漫画の地下労働施設に送り込まれたのかもしれない、と思っていた。黒服の男は私達をタイル張りの部屋に押し込んだ。壁はガラス張りになっていて、あらゆる角度から私達の様子がみられるようになっている。学校の教室程度の広さの部屋に、既に20人

程度の先客。魂の抜けたような顔をしていた。

騙しやがったな！カネ返せ！家族返せ健康返せ！引きずられてきた私以外の裸の男たちは、黒服に罵詈雑言を浴びせた。黒服は無言で一人ずつにスタンガンっぽいものを当てる。私達は苦痛に黙らざるを得なくなった。

しかし、いったいなにしたっちゅーねん。ええ女とイチャイチャデートしとっただけやないか。

「なんでこんなことになってしまったんやろか。」私がぼつりつつぶやく。部屋の扉は閉まった。

すると扉の周りを色々な女の人が笑いながら囲みだしたのだ。その中に優ちゃんもいた。

「ゆ、優ちゃん一体俺がなににしたっちゅーの？」

優ちゃんはにこりと微笑んでこちらを見た。それから大声で怒鳴る。

「なにもしねーからだよば——か」

優ちゃんのかわいらしいおクチが信じられないことを言う。

「お前ら男は、惚れた女に言うこと聞くとか何でもするとか幸せにするとか、できもしねー事ばかり言う割には威張りくさって何にもできねーじゃねーか。そのくせ女をバカにしてペットみてーにしか考えてねーんだろふざけんな。お前みたいな何にもできねークズみてーな男、普通に生きてる意味あんのかよ？」

優ちゃんがそういうと、周りの女子が同調して笑う。そうだそうだ、クズ男エロ男、エゴ男その他ココに書けないような、エロエロしく最大限の人間の尊厳もないような言葉を皆で浴びせた。

「いい男しかいらねーんだよ！世の中のために消えろクズ！」

そういうと天井から何かガスが出てきた。

ヤバい殺されてしまう。なんでデートしてダメ男だっただけで殺されてしまうのか。息が苦しくなってきた。周囲の男たちがバタバタと倒れていく。俺ももう死んでしまうのかな、ちょっと、ちょっとかわいい子と不相応なデートしただけやぞ。こっちの純真をだました方が圧倒的に悪いんやないの？

息苦しさに目が覚めた。

ダンナがわたしの顔のすぐ上にいて、加齢臭たっぷりの吐息をかけ、大いびきをかいて眠っている。

ごめんなさい。しばらくはあなたをマダオ（まるでダメなオっさん）とかいいませんよ。いい男じゃなくても威張りんぼうでもうそつきでも。もうしばらくはいいませんから。

## 戦場へ旅立つ私に

---

私は何かのお笑いコントの衣装のように迷彩服を着ている。性別は男性になっていたみたい。性別が変わった夢を見るのは私の中ではよくある話。ただ、男になったからといって、イケてる人生を送っているわけではない場合が多い。今回は、自衛隊さんか何かの武力を使うような部隊で訓練をしているらしい。一列に並んで仲間と点呼をとっている。

「番号！」

リーダーのような人が叫んだ。間髪いれず私の横が

「1」といったのでまねして大声で「2」としてみた。

ところが言った瞬間、仲間やリーダーに殴られる。なんで??

「馬鹿かお前は。1つつたからって横も見ないで2ってよく言えるな」

なにってんだ。普通そうでしょ。口答えしそうな私の顔を、リーダーはもう一発殴る。

「私が言っているのは、お前の確認不足がいけないという話だ。きちんと己が2番目にいることを確認して返事をしろということ。もう一度！番号！！」

私の横がもう一度正面を向いて「1」といった。

こいつはずるいやつだ。最初から1だと思って前だけ向いてやがる。自分が一番だと信じて疑わない、危ういやつだ。何でこいつの次に私が並んでいるんだ。でも事実一番だ。まあとにかく。

私は、横を向いて自分が2番であることを確かめ「2」としてみた。今度は殴られなかった。

次に一人ずつ武器と防具の確認を始めた。隣のやつが言っていることをそのまままねしてやろうと思ったが、なぜか聞き取れなかった。彼は意気揚々と戦場へ旅立ったようだ。私の番になった。リーダーは私の前に直立不動に立ち言った。

「武器は？」

ぶ、ぶきつつたって。私民間人ですし丸腰でしょう。あ、でも夢だからなんかもってんのかも。ってポケットを探るが、ガムとミント菓子しかない。背中を触ったりかばんの中を見たりするが、何にも入っていないんだ。

リーダーはイラついた様子で、

「お前本当にノープランだな。もっとよく探せ」

言われてかばんをひっくり返したがごみしか入っていない。

「服も脱げ！」

といわれたのであわてて服を脱ぎ裏地までひっくり返して探した。糸くずに紙くずごみ、携帯電話、カナリア色のメモ帳にペン。ペットボトルに財布。

「武器なんてありませんよ」

私はボソボソ言ってみた。リーダーは

「ごみの中もよく見ろ！持っていないわけがない。探せ！！！」

そうやって、私がぶちまけたごみの類をひとつずつ開いてみようとしてくれる。私もそばで一緒にごみをひとつずつ広げてみた。っつーか、今武器っていったら？武器ってのはこう、とがったり何してたりで……。

「お前今からどこに行こうと思っているのだ？」

どこって……。

「お前は明日目が覚める予定なのだろう？」

当たり前ですよ。リーダーは私をまた1発殴った。それから顔を上げろ話を聞けといった。

「才能は道を切り開く武器、金は己を守る防具。お前は、何の準備もなく明日という戦場へ旅立っているのか??」何の、って……。

「お前は、磁石も持たず行き先もわからず、目的もなく。守るべきものもなく戦う術も知らずして。こんな少しの金で命を守って戦場へ赴いているのか、と聞いているのだ。こんな、こんな粗末な装備で何年も、目的もなくすごしているのか。」

と、言いながら後ろを振り返った。

「そら、もう時間だ。身体だけを武器にしているといつかは絶対に破滅するぞ。もういい！そら、行けよ」

背中をけられるように押し出されたら朝が来ていた。

寒い中私は布団から背中をはみ出したような形でうつぶせ寝していた。

これからはたたたと、丸腰で戦場に突っ込んでいく。

## 化けの皮

---

「よろしくお願ひしまーす」 私は周囲にお辞儀をしながら照明がまぶしいスタジオに入っていく。

なんだか驚いたことに、私はテレビに出られるような人になっていたらしい。しかも、そこそこの需要のあるような人材になっていたみたい。パフか何かをもったいい匂いの人が「少しはたきます」とか何とかいって私の顔をパフパフする。私はお礼を言って顔を上げた。目の前にはモニターがあり、パフパフされている私の姿を映し出しているはずだ……。

って、これは……。ま、マツコDX????

と思うくらいの巨漢な私。しかも女性ではなくオネエっぽい。限りなく。

ちょっと待ってくれと思うまもなく本番がスタート。

例のごとくバラエティー番組でオネエキャラの私はいじられる役で。幸い私は与えられた役割はとりあえずこなせた模様。お疲れ様でしたーと和やかな雰囲気現場を終えることができた。しかし納得いかない。私がオネエになるなんて。私は普通の主婦なのに。

楽屋に戻ってマネージャーらしき人物に「どういうことなのだ」と問い詰める。私はこんな巨漢ではないし、オネエでもない。

マネージャーらしき人物はソファーにふんぞり返ってコーヒ一片手にタバコを吸っていた。鏡の前でときどき自分のカリカリと立てた髪のをいじっている。私が大声を出そうとすると、面倒くさそうに振り返り、頭をつむじを指差す。

何だお前。その人差し指をくるりと回してみろマジでヲコトぞ。

「ファスナー」マネージャーはそう言って、つむじをつまむような動作をした。

私も彼のまねをして自分の頭に手をやってみた。なにやら怪しげなものが手に触れた。

「それをぐーっと引っ張って。」

マネージャーはひっぱる動作をする。そしてコーヒを飲み干してゴミ箱にスローイン。

私は彼に言われたとおりに引っ張ってみると、マツコ風の外見がべろりとはがれていつもの私が現れた。足元には脱皮した蛇皮みたいに、きぐるみが落ちている。

「いいアルバイトでしょ？違う世界を体験できるっていう報酬があったじゃない」

金じゃないのかよ。私は少しむくれた。こんなアルバイトする予定もなかったし。

するとマネージャーはタバコの煙をぷはーとはいて言う。

「あのさ。普段からきぐるみきてすごしているようなモンでしょ。体型は。そういううるさいこと言わない。それに、わかったでしょ？」

マネージャーはきぐるみを拾い上げた。

「自分みたいな一般の、何のとりえもないような普通の主婦なんかよりさ。こういうキャラ作ってるほうがずーっと需要あるんだってこと。素のままのオタクなんていらんよ。」

世の中の需要だけで自分の価値を決めるわけじゃねえ。自分が好きかどうか位は自分で決めてやる。

「でも、実際はそうでしょう。素のままのあなたを求めるモノズキくないわけよ。あなたは何ら

かの形で補って繕わないと世の中には不適合なの。ちょうどいいんだよきぐるみは。インスタントでお手軽だし。繕っているってことがまるわかりだから、周囲もそういう風に軽く接してくれるし。ブーム過ぎたら忘れてくれるし。要は。」

マネージャーは私の頭を軽くたたいて言った。

「何着きぐるみ持ってるか、で、世の中の渡りやすさがきまるのよ。もっと要領よく、もっともって、生活質をお手軽に高めるんだったら、お手軽なきぐるみをもっとたくさん持てばいいの。きぐるみだってことを忘れないで、中身を鍛えながらさ。とりあえずの措置としてきぐるみ着せ替えちゃえばいいわけじゃない。うまくやろうよ。頭使いな。姑息だなんだって言うてうちは変わらないから。」

何枚も着せ替えていくうちにさ、きぐるみきていることがわからなくなったりさ、繕わない自分がどういふものか説明できなくなったりするのも嫌なんだ。

変わるこってそんなに大事か？でも現状が不満なら変わるほうがましだろうか。

中身を鍛えるってことがどれだけ難しいか。

怠惰に30数年過ごした私は身にしみている。特に、ここ数年の自分の没落がどれだけ著しいか。

一人だったころと比べて何でも考えてしまい、「結婚で足かせをつけられた」気分になって落ち込むことばかり。急場しのぎに「嫁」「主婦」「妻」のきぐるみを作ってはみたんだが、きぐるみを脱ぐ場所がどこにもないんだ。どこにも。しかも急場しのぎだからさ、きぐるみ自体あんまり評判よくない。

私が頑固に固持しようとしている「自分」なんてものは本当にたいしたことなくて、やっぱり世の中にとってきぐるみの私のほうが、価値があって求められていたとしても。割り切ることができていないんだろう。

いまだにきぐるみを見つめ悶々とし続けているんだ。

## 冬のかまきり

---

私はかまきりになっていたようだ。

ダンナがわたしに「そろそろ冬だから早く俺を食べてかわいい子供を産んでくれよ」といった。私は本能のままに何も考えずにダンナを食べる。ダンナは私にじっとニコニコとしながら食べられている。

手から食べた。カマの先のとげも痛いと感じつつ食べた。彼は痛いだろうにニコニコしていた。私は本能のままにどんどん食べてしまう。後は顔だけになった。私は両腕で彼の顔を抱いている。ココロでは悲しく「ごめんね」「食べたくないよ」と思うのだけれど、身体は何の迷いもない。私は彼を食べ終え一人ぼっちになった。

枝の上に羽を広げて坐っている。周囲のメスたちは次々と卵をうみ始めるのだが、私は卵が産めない。卵の産みかたを忘れてしまったかのように、身動きができない。

なんだよ、あんなに大事な人をパクパク食べといて、一番大事な役目が果たせないなんて。私は彼の子孫を残せないダメカマキリだったなんて。変な本能で彼の命を奪っておいて、彼の子孫を残せない。役立たずもいいところだ。何のために彼は笑顔で命を絶ったのか。

もう、カマキリ的に役に立たなければ鳥にでも食べてもらおう。

そう思い葉っぱの表に立つ。

しかし鳥に食べられようとする瞬間に、本能が顔をだし瞬時に葉っぱの裏に逃げて難を逃れてしまう。考えたら彼が命をささげてくれたんだ。自分から捨てるのはやっぱりバカみたいなこと。死ぬ勇気もなく、したたかに好きに生きよう。どうせ求められてはいないのだから。彼の命に報いることができなかつた後悔を抱いて生きよう。

やがて冬が来て。私は淋しく一人で立ち枯れて枝と同化し、冬の一部になる。

拉致されてあちこち改造をされてしまった夢を見た。顔かたち全く違う人間に作りかえられてしまうんだ。

「都合のいい女の人形」になるべく矯正施設に入れられてしまう。改造されたものはみな、行動を強制的に制御できるリモコンの受信機が埋め込まれる。普段は自由に振舞うが、いったんスイッチを入れられたりプログラムを作動させられたら、身体が乗っ取られるように、そのリモコン操作通りに動かされるのだ。

私はそういう集団生活に要領よく上辺をなじませる賢さもなく、反抗し続ける勇気もなく。リモコン操作以外の場面においても、洗脳されるほど割り切って染まりきることもできずどっちつかずなままだった。

やがて矯正施設を出て、低ランクの人形として、世の中に送り出されてしまうことになったようだ。

ガチャガチャのカプセルみたいなのに詰められて、施設の中でモノ好きでお金のない買い手が来るのを待たされていた。

しかしほどなく、モノ好き、というか商売にしたい好きモノな人物がやってきて、私達低ランク人形をまとめて買い上げた。「怪しいお店で移動コンパニオンガールをやれ」というようなことだった。

ある時は場末の薄暗いバーの中。またあるときは温泉旅館の座敷。居酒屋やレストラン、何かのホールにいた日もあった。来る日も来る日も、リモコンスイッチを入れられ、オーナーの希望通りの行動をとる。

このオーナーは用心深く強欲で、自分の知らないところで人形がどう動くかがとても気になっていた。自分がすべてを制御したくて、24時間常にリモコンを携帯し、私達の行動のすべてを自分の手中に収めた。衣食住最低限な生活動作だけしか自分の意思で行うことができない。都合のいい家畜。

行動を制御されていることで、平和だったころを思い出して涙を流すこともできず、隣にいる同じような境遇であろう女たちとも会話することもできない。

そんなある日。ある温泉旅館に行って接客をしろという命令を受け、私達は仕事先に向かった。その温泉旅館ではある大企業の慰安旅行が行われていた。むさくるしい上下関係がありそうな男たちが、同じ柄の浴衣に身を包み、同じ御膳を食べている。同じような話題を共有し整然と年功序列に並ぶ。冷静に考えるととても異質な光景。そんな中私はあるグループの中に通された。10人程度のグループ。若い男性たちはエネルギーに騒いでいた。しかしそのグループの若者たちは別のグループを指さして言う。

「あのオジサンたちのところに行ってパーっと明るくしてあげて」

言われた席に行ってみると、確かにどんよりとしたオヤジたちが泡のないビールを飲んでいて。その中に、私のダンナがいるではないか。

私のダンナもやはりどんよりとしていて、口数も少なく、ただ座ってその場にいるだけのような



感じだった。

「はじめましてよろしくお願いします」プログラムされた内容を私はただ喋っている。  
本当は「あなたの嫁ですよ」と叫びたいのに口は動かない。

その時ダンナはいう。

「悪いけどそんな気分じゃないからよそに行ってくれないかな。今日は嫁がいなくなった日なんだよ。ここにいる連中はみんなそうだ。」

「大変だったでしょうね。では、奥様のご無事を祈って一緒に乾杯させてくださいね」  
操られたクチがそういう。その奥様ってのは私なんだ。私なんだ。何度も言おうとするのだがクチは思う通りにならない。ダンナは私が自分の嫁だということに気がつくわけもなく。会話は永遠にすれ違う。

「もう時間だ」

オーナーの声がして私達は挨拶をして仕事場を去る。

私とダンナも永遠にすれ違ってしまふのだ。

## ショッカー育成過程

---

手術台に寝かされている私は懸命に抵抗をしている。

白衣に身を包んだ、怪しげで顔もよくわからない人たちが、寝ている私を取り囲んでいる。

「やめろーやめろー」 暴れる私を両脇から誰かが取り押さえてしまう。

意識が薄れゆく中、私はこの場面どっかで見たとあるよなー、なんて漠然と考えていた。えーっと、どこだっけ……。ああそうだ、あれはショッカーの組織に捕まったライダータケシが、仮面ライダーに改造されるときに場面だっけ、って！！

改造されたのか！！意識が戻った私はすぐに自分の顔を触る。仮面をかぶったようなのっぺりとした質感の、人間の皮膚とは明らかに違う感触。どうなってるんだ！！と叫んだはずの私の声は「キィィィィイツ」と、部屋に甲高く響く。

耳を疑った。何を喋っても「キィィィィイツ」 豊満な体形はシュッと引き締まっている様子なのは良かったが、ケミカル繊維っぽい感覚の、全身タイトの手触り。私はよりによって、仮面ライダーでもなく、自分で喋れる怪人でもなく、全身黒タイトのショッカーに改造されてしまっていたのだ。

ほどなく私は、タケシとの戦いに連れ出される。そして瞬間で派手な爆撃とともに海に沈みゆく。ああこれでショッカー人生が終わる……。そう思うと、ドラクエの教会の音楽が響き渡る。私はまた、ショッカーとしてよみがえり、タケシに倒されるエンドレスな日々。最初はショッカー組織に対してだけの強い恨みだったが、ほどなく、タケシへの強い憤りに変わる。

こいつ。自分だけ改造人間の恨み晴らしやがって。運よくライダーに改造されやがったからいいものの、ショッカーになるとこんなんだぜ。お前に私たちの悲哀がどれだけわかるんだ。底辺の人間の苦しみを思い知らせてやりたい。お前だけが正義だと思うな。お前の正義のみを押し通すな。こっちはこっちの事情があるんだよ。何が悪だ、何が正義だ。そんな事はどうだっていい。

そしてタケシへの攻撃は本気と化していく。

## 花びらまき見習い

---

夢の中の私は、結婚式の何かの係員のようにだった。結婚式を終えたおふたりが、教会を出てくる前に、教会の道にバラの花びらをまく作業をしていた。贅沢な結婚式だ。そして結構な重労働だと思った。

雑念が沸いた瞬間、先輩と思しき礼服を着た男性に、スリッパでアタマをたたかれる。派手な音が周囲に響く。先輩は私の後ろで仕事を監視していたらしい。

「もっと考えてやれ。雑な仕事はすぐわかるんだぞ」

はいすんません。でも一所懸命やってただけだな。

「バカ。オメエは手順何にも覚えてねえんだな。今回のお客様は白とピンクってご指定だっただろうが。オマエは白とピンクしか持ってきてねーだろ、しかも花びらだけ。」

そういう指定なら、ソレしか持ってこないじゃないっすか。先輩は一瞬息を呑んだ。そして深くため息をつく。人間は心底がっかりするとそんな顔になるらしい。

「いいか。大体なあってねえよテメエ。お客様はなあ、花はバラ、色は白とピンクっていう注文だろ。それはだな、“白とピンクが引き立つように”って意味と考えろ。白とピンクの花にこの灰色のアスファルトってどうよ？」

先輩は、長いホワイトのカーペットをひく。縁取りには金糸で刺繍がしてあった。

「このカーペットは防汚加工してあるから、白でも大丈夫だっていってあっただろ？こういうとき使うんだよ。人の言うこと覚えてねえから使えねえんだよ、てめえは。」

先輩はスリッパでもう一発アタマをたたいてきた。

「そして、花びらって言ってるけど、花びらだけだと色とかモチが悪いだろが。花びらに花も混ぜろ。花もリアルな造花と本物をバランスよく混ぜるんだ。花の色も、いろんなピンクがあるだろが。ピンクも2種類、白も2種類あったろ？それ混ぜるんだよ。」

「で、金糸の刺繍にかかるようなふちの近くにはな、緑を添えるか、観葉植物で高さと変化をだせよ。で、仕上げは」

先輩はそばにあるダンボール箱から、霧吹きのようなものを取り出してきた。

「ローズエッセンス入りのウォーターだろうが。足元から自然にきつくない香りをふわりとたたせて、お客様の思い出に香りをつけてさしあげるんだ。少しずつまけよ。この前はカサブランカだったから、エッセンスは使わなかったけど、今回はバラだから使っとくっていったら。そしてかごの中は」

先輩は白い籐で編まれたリボンの付いたかごを取り出す。

「お客様持込のライスシャワーに、本物の花びらだけ混ぜろ。花びらは本物で、って今回のお客様のご指定だからな。わかってんだろエッセンスはまくなよ。匂いが手に付くからな。」

今度はスリッパでケツをたたかれた。

「まったく本当に使えねえやつだなオメエ。どんな仕事でもな、カネってのは命かけてもらう人たちがいるんだ。俺たちそうやって巡ったカネを貰って、メシ食ってるだろ？もっとオメエも気合いれろや。だからいつまでたってもダメなんだ」

そして、先輩の説教を聴きながら、作業は進んでいく。先輩も共に身体を動かして作業に入ってくれた。そして時間がきて、結婚式に出席したお客様が教会の外に出てきた。主役のふたりを祝福するために並び始める。

「少しバラの香りがするね。たくさんまいてるからね」

お客様が少しずつ話しをしているのが聞こえた。私たちは離れたところで起立していた。やがて、主役のふたりが教会から出てきた。ふたりは満面の笑みをたたえてとても幸せそう。空は青く晴れていた。ライスシャワーがキラキラと舞った。周囲を幸せの空気がふんわりと包んでいる。ふと吹いた一陣の風が、離れたところに起立していた私たちにも、幸せとほのかなバラの甘い香気をふんわりと運んできた。

「見ろよテメエ。アレが幸せの顔だ。コレがプロの仕事だ。俺らの仕事だ。誰が誉めるわけでもねえが、俺はこのときがとても嬉しい」

先輩は、直立不動で結婚式の光景を見つめながら言った。やがて式は滞りなくすみ、教会の周囲も静かになった。

「撤収だ。ぼけっとすんな」

先輩に促され片付けに向かう。

夢の中で自分が普段過ごしている性別と、違う性別になる、という経験をするひとって多いのだろうか。私の場合はよくあることだ。あるときはウルトラマンの付き人になって「てめー3分間しか俺戦えないんだから、スポーツドリンクくらい用意しとけよお冷えたやつ」とスペシウム光線ガシガシ当てられて、宇宙の果てまで飛んでいく夢。またあるときは、RPGの勇者を目指す一人になって、「あんた男の癖にだらしないわね。野宿できないの?」と、踊り子のマー〇ヤにバカにされる夢とか、「今日は俺パフパフ小屋にぜひ行くんだ、絶対いくんだぜえ」と歌いながら小屋を探すものの、朝になるまで見つからないとか…。そういうトホホな夢ばかり見ている。

この前は一般的な男性になって、家庭を持っている夢をみた。奥様に浮気を疑われて責められている夢だったな。

深夜に帰宅した男性の私。

ふすまの後ろでは子供が寝息を立てている。炊飯器からご飯を入れて、インスタントのお茶漬けの袋をを探している。電気ポットから湯気が出て、お湯が沸いたのを知らせていた。テレビは小声でニュースを読んでいる。正面に私の嫁と思しき女性が座っている。生活音だけが遠慮がちに響く真夜中の台所。彼女との会話はまだない。彼女はじっと私の挙動を見つめている。女の勘が全開になっているとき独特の、刺を含んだねっとりとした場の空気。

何があったんだ、何でこんなに気まずい思いをするんだ。私が何をしたというのだ。疲れて帰ってきたのに、仏頂面されて迎えられる覚えはない。こんな顔して起きているくらいなら、寝てくれて構わない。私は彼女に話しかけた。

「何か言いたいことあったらいいだろ」少し声が荒々しくなった。

「あなたこそ、私に言うことあるんじゃないの?」彼女は頬杖を付いていた手をテーブルの上に組みなおす。

「ねえよ、何にも。何だってんだお前さっきから。気分わりいよ。そんな顔するくらいなら寝てろや。俺何して帰ってきたと思ってるべ。」

男になった私はとてもやさしくない言葉を吐く。ああ夢の中とはいえ、男になったらジェントルマンでいたかったのだが。仏頂面をしているのだろう。無言でお茶漬けをガブガブとクチの中に入れる。

「今日ね、家にお客様がきたわ。私に、彼と別れて欲しいんです、っていったわ。相手の方は本気だっていった。あなた結婚の約束をしたそうね。」

お茶漬けの飯粒が鼻腔で踊っている。浮気してたのか私?? そんなにもてる男なのか私? つか身に覚えがない。何を言っているのだ。証拠でもあるのか。彼女は話を勝手にどんどん進めていく。

「大丈夫よ。もう、あなたへの情はないわ。でも、子供に不自由をさせないでね。親権は私が持ちます。慰謝料とか養育費なんかの内訳は、弁護士を通して話し合しましょう。」

「だから、ちょっと待てよ、俺浮気した覚えなんてないんだぞ。相手の方って何だよ？誰がきたんだよ、どんなオンナなんだ！名前は？連絡先は？！」  
すると、彼女は急に感情的になり大声を出して立ち上がった。

「オンナじゃなくて男がきたのよ！！！」

え？？男？？？

「ええ男よ！馬鹿にしてる信じられない！！！」

彼女のヒステリックな声。私の混乱しきった頭の中に、なぜか満面の笑みを浮かべた今の現実世界のダンナの顔が浮かぶ。男ってあいつ……。なのか？？

私は混乱と驚きそのまま目を覚ました。

まず、夢でよかった、という安堵があった。現実の私のヨコではダンナがフゴフゴいいながら眠っている。枕からそこはかとなくオヤジの匂いがした。男になっても今のダンナにしか浮気できなかったアブノーマルな自分のことが、とても残念だった。ああ夢の中くらい、もっと別な人とイチャイチャしたかったわなあ。ありえないわ。

今日の鍵言葉は「エコバッグ」「換金所」「やり直しができるらしい」「がんばらんといかんね」

私は穴のあいたエコバッグに何かを入れて走っている。隣で同じように穴のあいたバッグを持って走っている人が私に話しかけてきた。その人は伊勢丹の紙袋をもっていた。鮮やかチェックでとにかくもの凄い大きな袋だった。彼が笑いながら声をかけてきた。

「あんたの袋穴あいてるよ。」知ってるよ。でもあんたの袋も穴あいてるぞ。

「えええええ！！」その人はマスオさんばりに驚いて自分の袋を見た。

がつつり底に空いた穴をみて「まち？」といった。

「そりゃー急いでいかなきゃ大変だよ。あんたも急ぎな」

伊勢丹紙袋の彼はなお一層速く走りだす。「換金率が低くなるよ」といった。

ええええ！今度は私がマスオさんのように驚く。お金が絡むならそりゃー急いで行かなきゃね。ってどこに？まあとくわからないけれどあの人の後ろをついていけば何とか行きつくだろう。袋の穴を抑えたりしながら換金所らしいところに向かっている。時々、空から中身が降ってきて補充がある。しかしそれにもまして底から漏れていくものが多い。漏れたものをすぐ拾おうとする。しかし拾う前に泡みたいに消えちゃうんだ。

息も絶え絶え、やっとの思いで換金所にたどりつく。

換金所には先に伊勢丹紙袋の彼がいた。最初はにこやかに話していた様子だった。しかしいきなり

「こんなに少ないんですか？僕は何にも知らなかったんですよ！」と声を荒げている。

換金所からは抑揚の少ない年配の男性の声がした。

「しかしながら事実として貴方はものをこれだけしか持ってこなかったですよね。」

「でも僕のせいじゃないんです。なんで僕の言い分を聞いてくれないんですか？」

彼は換金所前のテーブルを激しくたたいた。

「みんな待ってるんですよ。迷惑ですからどいてください。何度も警告しましたよね。」

年輩の男性が声を若干荒げた。すると警備員らしき人が伊勢丹紙袋の彼を引きずっていく。

「僕は知らなかったんだ！家族サービスだってちゃんとしたのに！僕はなにもかもちゃんとしてたんだぞ。親の面倒だってちゃんと見た！仕事も真面目にしていたし、人並みにいいこともしていたのに！！僕の人生完璧だったのに！！」

紙袋の彼の声が遠ざかっていく。私の番が来たみたいだ。まあなんだかよくわからないけどお願いします。

「はいはい。」年輩の人に紙袋を預けた。

彼は老眼鏡をかけ直し何か帳簿をもったものを照らし合わせる。

「うーんと・・・。少し確認をしておこうかね。」

彼は老眼鏡をはずして言った。

「これは夢の中で、ここに来たのはあなたの意志ではないのだね。」

ええ。そうですね。夢なんてみたいと思ってみるのではないですから。

「そうだろうね。じゃあ、やり直しも聞かし、初めて来てくれたから説明しておくからね。あなた以外にもここには様々な人が来るの。で、色々私もその都度説明するんだよ。その説明を覚えていない人もいるし、覚えていてくれる人もいる。心のどこかで覚えてくれていて、生活を改めて幸せをつかみ直す人もたくさんいる。ココに来る人ってのはたいていレッドカード直前なんだ。だからよく聞きなさいよ。」

彼は私に袋を返した。

「自分の持つ袋を改めてみたことないんだろ？確認しなさい」

言われて初めて私も袋を確認した。海がプリントされた袋。容量はさっきの伊勢丹紙袋よりも小さめ。素材は紙ではなくて使い勝手のよさそうな麻袋。あいていた穴は小さめだが、油断すれば広がりそうなあいたばかりの感じの穴。

「簡単に説明しよう。この袋の大きさはあなたが生涯がんばったら稼げるお金を入れられるだけの大きさ。開く穴はお金の出口。袋の材質は信頼の質。柄はあなたのお好みの色。これら进行分析してごらんください」

彼は私の袋をもう一度手に持って言う。

分析って言われてもよくわからないよ。まあ麻袋は洗いやすくてようございますね、的な。

彼はため息をついた。

「分析するとね。貴方の能力はそんなに大きくなくて、稼げるお金も知れてる。持ち手もあまりしっかりしてないね。お金には執着をしていないみたいだ。袋には穴を開きかけている。クレジット払いとか借金払いとか早く終わらせなさい。袋の穴がどんどん開くと貴方の袋は小さいからすぐに無くなっちゃうよ。老後は一人だよ。こんなんじゃ役所も火葬してくれないで変死扱いだ。鳥も喰わない。大迷惑だね」

なんて的確な。しかしショックだ。

「穴を早くふさぎなさい。そしたら私が新しい袋を申請してあげるから。今度は麻袋じゃなくてアタッシュケースにしてあげるよ。借金を早く返済しなさい。返済して信頼を作りなさい。そして大きな借金は二度としないように。アタッシュケースになったらね、補充も楽だし運搬も楽よ。タイヤついてるから。小さいアタッシュケースしか用意できないけれど、きっと大事にできるからね。穴があかないんだから。そしたらその中身を大事な人たちにわけられるようになるから。それがあなたの理想なんでしょう。」

父親が夢に出てきて説教したかと思ったよ。なんか、何かとってもごめんください。

「次に来的时候には袋が交換できるといいね。じゃ。」

彼は封筒を一つ差し出した。

「これが今回の換金結果。ひと桁万円にもならないよ。」

そうか。それが...

「それが今のあなたの社会的な価値。もっと頑張りなさい」



ありがとうございました。私はお辞儀をして換金所を後にした。

換金所を後にしたら朝が来た。

しばらくぼんやりとしていた。ああやっぱり私は今社会的には価値が低い方なんだ。でも、少し頑張ったら私を信頼してくれた人に信頼を返すことができるんだね。一人で火葬されるのはあまり変わらないみたいだけれど、死んでからのことなんて痛くないからどうでもいいもんな。生きている人の迷惑にならなきゃいいだろ。

今から補修ができるみたいだからもう少し何とかしないとな。

次は2桁万円目指せたらいいよなあ。

## 孔雀とツル

---

「マッチはいりませんか？」赤い毛糸の帽子をかぶった女の子がマッチを売っている。いまどきはチャッ○マンの時代だよ、マッチなんてないぜ。それに、この乾燥した季節に炎を売ってのは大概にしてもらいたい。繁華街を歩く大人たちも見てみぬふりをする。そりゃーそーだわなあ。

女の子は私のところにもやってきた。ダメだよ、オバチャンはマッチなんて買う気はないからヨソにいったくれな。

すると女の子は「2個買ったらもうひとつオマケにつくんですよ？」と商売上手なことをいい、更に「お友達をご紹介いただければ、今ならヒミツのビッグな特典が！！」と今度はマルチ風。いまどきの少女は商売上手なんだねえ。ヨシのった。しゃれだが買ってみることにするよ。

「ありがとうございます！これ、オマケのマッチです。またごひいきに！！」

少女は妙に明るい声でお礼を言って去った。

さて。手元には古臭いツルの絵が描いてある箱のマッチと、怪しげな孔雀の絵が描いてある箱のマッチがある。仏壇にでも置いて舅さん夫婦に使っていただこう。舅さんが早朝、仏壇にお線香を備えるために孔雀のマッチに火をつけた。火をつけたら七色の炎が出てきた。

「おおキレイじゃのお」舅さんは子供のように喜んで何度も火をつけた。

「バアサンきてみろ、すごい炎があるぞ。花火みたいだ」「あら、こらーめずらしー」ふたりは喜んでいる。そしてあっという間に、孔雀のマッチを全部使ってしまった。

「あらもうねえわ。ジイサンもうひとつの使って早く線香つけてお供えしなよ」

「そうじゃね」ふたりは今度はツルの箱を開けて火をつけた。

一見普通のマッチだった。なんの代わり映えもしない炎と、火薬のこげる香ばしい匂い。若干火のつき具合が悪かったらしい。舅さん夫婦は何度もマッチを試してつけたので、ツルのマッチもなくなってしまったようだった。

「なんじゃ、これは何もないんじゃね」舅さん夫婦はがっかりしたようにみえた。私も、ツルの箱のマッチに何の変化も感じていなかった。

箱をよく見ると、孔雀の箱には「七色の幻想：一本ごとにロマン色とりどり」と書いてあった。

ツルの箱には「長寿の願い：1本使用でやく1年※使いすぎ注意！！！」と記されてあった。

あの人たちいったい何本擦ったんだろう。1本1年っつーから・・・。

あまりの恐ろしさに夢は一気に覚醒。舅さん夫婦は今年金婚式を迎える。

## Dランク

---

誰かの無遠慮な指が、私の腹の贅肉をつまんでいる。餅じゃねえし、と言おうと思うが声が出ない。ガムテープか何かでクチをふさがれているようだった。

「最近は本当に、安くなりましたね。質も低下してます。」

年配の女性の声だった。

「そうですね。昔は筋肉の次に高かったのに」

若い女性の声もする。私の贅肉をつまんでいるのは無遠慮なこの二人らしい。何の許可があって、おまえらは人の気にすることを堂々と喋りながら、肉なんかつまんじゃってるんだ。私が喋れないのをいいことに、二人はつまんだ肉を揺らしだした。

「大体、貧乏人のデブってのは本当に始末悪いのよ。だって、デブになるまでの単価自体安いじゃない？」

言ってくれちゃうじゃないの。

「そうですねえ。この個体の場合、カレーとチョコレート八割ってところでしょうね。マジキモですう」

若い女が言った。喋り方がいちいち腹が立つ。その後、ペンで何か書いているような音が聞こえる。人の肉質を評価しやがって。まるで精肉屋の枝肉みたい。年配の女性はなおも遠慮なく喋り続ける。

「そう。全部、安い油。安い油摂取してさらに低レベルの油へ合成。つくづく、最近のデブは安くなったわ。こんな非生産的で無駄なものってないわ。一昔前はこの個体と同じレベルに太るためにはさ、もっといいもの食べなきゃ無理だったのよ。今じゃあ貧乏人ほど太ってるじゃない。これぞ...。」

**デブレスパイラル**なんてうまいこというんじゃないだろうな

「エゴの極み、ってところですね最低。」 「つつーわけで、はい」

私の腹に何か熱いものが押し付けられた。もしかしてこれは烙印？

「Dランクですね。ああまた無駄な熱量が」

「増えていくわね。困ったものだわ。もう少し自覚出ないものかしら」

その後二人はクチをそろえていった。

「ミンチになーれ」 「ミンチになって家畜のえさになって出直しやがれ」  
足元からミキサーのような機械音がして私を何かが飲みこんでいく。

## とろけるおばちゃんたち

---

とある健康ランド風の、温泉施設にいた。

私の前の席で、3人くらいのおばちゃんが仲良く世間話をしながらビールを飲んでいるようだ。

「本当にこのいっぱいがやめられないのよね」

「ホントよねー。飲みながら食べるって、またものすごい幸せなのよねー。」

「そうよねー。おいしいものがあれば、とりあえず何でもいいのよねー」

などと賑やかに話をしている。なぜか私は、そのおばちゃんたちの会話に耳を傾けてしまっている。

「でもさあ、おかげで私体重だいぶ増えちゃってー」

「ダンナに結婚詐欺とか言われたのよー。あんたの稼ぎのほうに詐欺じゃないのさーって言ったわー」

「んははーいえてるわー。でも、おかげでひざとか痛くなっててね」

「あたしも健康診断で血糖値とか問題っていわれたけど」

そこでおばちゃんたちは声を合わせてこう言った。

「かんげーないのよねー。おいしいもん食べられない人生なんて、考えられないわよー——」

そして高笑いをした。

「でもね」

笑いがひとしきり収まった後、その中のおばちゃんの一人が急に、振り向いて私の顔を見た。

「放っておいたら体重増えすぎちゃって、病気になったのよ。あと20キロ減ってたら、こんな苦しい思いをして死なずにすんだのよ。病気なんて薬が治してくれるって、そう思ってたけど、実際はそうじゃなかったの。」

そういった瞬間、その振り向いたおばちゃんの顔色が急激に悪くなり、とろとろに溶けて足から消えていった。何かのホラー映画のようだった。私は金縛りみたいな感じで、恐怖で動けなくなっていた。そして二人目のおばちゃんが私のほうを振り返る。

「あたしなんか介護が必要なカラダになって、何十年もみんなに苦勞をかけちゃったわ。介護のときも体重のおかげでやりにくいか、みんなに敬遠されて。死んだ瞬間、自分の死ぬまでの何十年かの状況が一瞬でわかっちゃって、そのときは呆然としたものよ。あたし認知症だったんだってわかったときのショック。」

二人目のおばちゃんも同じようにどろどろに溶けた。私は逃げ出そうとしたがカラダが動かない。せめて目をつぶろうとした。すると3人目のおばちゃんが、なぜか私の後ろに立っていて、私の顔をつかみ、目を無理やりに開けさせて言う。

「私は体重のせいで、やりたい仕事に就けなかったし、職場でもデブだからってみんなの会話のオチに使われたりして、心がどんどんすさんでいったわ。死んでからわかったの。生きているうちに、まだ若いうちに。ちょっと体重落として健康管理をしておけば、こんなひねくれた人生じゃなかったんだわ。って。」

3人目のおばちゃんは、私の顎をつかんだ。

「あんたも、もうじき私たちみたいになるのよ。今のままどんどん太って、健康管理もできなくなって。自分が努力もできない癖に、事実を言われて勝手に傷つくような。自分勝手に自堕落なオンナなのよ。あなたは。だから、早くこっちへいらっしゃいね」

おばちゃんは、私の顎をつかんだ指の先から、どろどろと溶けてなくなっていた。辺りはただ夜のように真っ黒で。私の体はピクリとも動けず声も出せない。足元にコールタールのような、古くて黒い油の塊がところどころにベタリと落ちている。おばちゃんたちが溶けた後だろう。

静寂の中、私は何かの気配に気がついて横を向いた。

ガラス窓には醜くぶくぶくと太っているいつもと同じ私の姿が映っているだけだった。

家で台所の拭き掃除をしながらテレビを観ていたら、いきなり白衣を着た人たちが数人上がり込んできた。

舅さん夫婦は笑顔で迎えた。私を指さして「これなんですよ」というのだ。

これ、ってなんだ。あんたらとうとう嫁をモノ扱いか。人間捨てたな。

舅さん夫婦に「これってなんですか？この人たちはどんなお客様ですか」

と大声で尋ねた。特に舅さんのほうが耳が遠くて若干大声を出さないと無理なのね。舅さんは大声で私の質問に答えた。

「お前にとっても俺らにとってもいいお客さんだ。お茶を出しなさい」

白衣を着た人の一人が異常なまでの愛想良さで答えた。

「いいえご主人お構いなく。私どもは仕事で来ておりますから。さて早速でございますが、必要事項にご記入をお願いします。」

舅さんに老眼鏡と書類を渡した。舅さんはコタツに坐り、姑さんと何やら相談しながら書類を書いている。

舅さんが書類を持って行ったのを見ながら、別の白衣の男が馴れ馴れしく声をかけてきた。

「さて。奥様も。早速ですがこちらの質問にお答え願います。ああ、申し遅れました。私どもは贅肉仲介販売業を営んでおります・・・。」

そういいながら名刺を出してきた。ぜ、贅肉仲介販売業ってどういうことでしょうか？

「あなたがお腹にためているその脂。グラムいくらでこちらが買い取りをさせていただくことができるんですよ。私共が買い取った脂は必要な方々に提供させていただくことになりまして、奥様はご希望通りに痩身ができるという、まさに全世界が待ち望む業種でございます」

素晴らしい。しかもお金になるんでしょうが？販売っていうからには。

「ええ。奥様のほうにも若干の手数料が間接的に入るかもしれませんが、まあブリーダー登録されている方のほうに代金はお支払いしておりますので・・・」

ブリーダー登録？「ご主人様のほうに・・・。」

なんですと。ご主人様ってさっきから言っているのは私のハズバンドの事ではなくて舅さんのことだろ？

舅さんが私を太らせてその贅肉を売って私腹を肥やさんとしている、と。私は家畜として飼われているような言い方じゃないか。しかも、カネは舅さんに入るんだろ？ダンナではなく舅さんに！

馬鹿にすんないい加減にしやがれ。誰が脂とらせてやるもんか。人間タダで太れるわけじゃねえんだぞ。この脂肪一つずつが無駄食いのカネかかってんだ。

安い脂でも貯めたもん勝ちだぜ手数料ならこっちに直接支払いやがれ。払えなければ暴れてやるぜぶひ————。「こら待て押さえろ」舅さんや白衣の人たちが猛々しくなった私を抑えんとする。私の怒りはおさまらない。

通勤途中の道端。電柱の下に水仙の花壇がある。古い街灯と一方通行の道路標識。ガリガリに痩せた女の子がそこに座ってぼんやりしていた。なんだか飢えている子だと感じて、私のお昼ごはんのお弁当をあけておにぎりを差し出した。ひとつだけだがさあ食べな。すると女の子は首を振った。

「おかあさん以外の方が握ったおにぎりが食べられないの。食べたっておえってなる。ごめんね。親切なのに」

女の子は申し訳なさそうに言った。こういう人いるよねー。潔癖症ってやつ？まあ気にしないけれども。なら食べなくてもよし。

でもどうしてもお腹がすいてダメなときには、とりあえずクチに入れなさいよ。ラップに入れて握ったの。直接私の手に触れてるわけじゃないからね。梅干しだって、ちゃんとお箸でつまんで入ってるの。だからどうしても時には食べないとだめだよ。

「うん。ありがとう。」女の子は笑っていた。

いったん通り過ぎたものの、なんだか気になってまた振り返ってみた。女の子はもうそこになかった。私のあげたラップのおにぎりがカラカラに乾いて転がっていた。

あああの女の子はもうこの世にはいないんだ。おにぎり結局一口も食べてないじゃん。私が握ったおにぎり食べて生きるより、おかあさんのおにぎり待って死ぬことのほうがましだったんだね。

なんて冷淡に考えている夢だった。妙な夢だった。

しかしその夢を見た翌日も、その子は出てきて道端に座っている。その翌日も。

そんな事が1週間くらい続いた。夢の中身は各々全く違うのだけれどあの子が必ず出てくる。声をかけようと近づいたら見えなくなってしまう。いい加減気持ちが悪くなった。今晚出てきやがったら絶対声かけてやるんだ。消える前に声をかけてみるんだ。今晚こそすっきりしたい。

そう思い眠りについた8日目、彼女は顔を出した。

彼女が出てくるまで結構気分のいい夢を見ていた気がするが、出てきたら一気に内容を忘れてしまった。とにかく一声かけておかなければ、また後味が悪くなりそうだった。早足で彼女のそばに向かう。

消えかけた彼女の腕をぐっと掴む。何とか間に合った。

あんた毎日これ見よがしに夢に出てくるけど、何が言いたいの？

「別に」

彼女は不敵に笑った。捕まえている腕は細く、割り箸を握っているくらい頼りない感じだ。

「何を言いたいわけじゃないけどね、親切なおばさん」

私の手をゆっくり振りほどきながら言う。

「なんでおにぎり食べなかった、とか月並みなこと聞くつもりなんでしょ？」

ああ。それも言いたいけれど、何より言いたいののはもう夢に出てくるなってことだ。あの時無理やり食べさせればよかったのか、とか コンビニ一緒に行けば良かったのかとか、カネだしてやり

やいいのか、とか、交番連れてってやればよかったのか、とかとかとかよお。後悔ばかりさせやがるじゃないか。あの時ああしていれば、ってさあ。なんにも言うことなければでてくるんじゃないよ。

「後悔してんのはおばさんの勝手でしょ？」

勝手だがな！！

「で、おばさんの夢に出るのも私の勝手だよな？」

ああでも私の夢だ。私の思考だ！

「そう。これはおばさんの夢の中。おばさんは夢の中の思考すら、自分でコントロールすることができていないのね。そして後悔ばかりするの。みっともないと思わない？」

女の子は後ろを振り返る。私のあげたおにぎりはしっかり後手に握られている。クチを付けた形跡は皆無だ。

「私お母さんのおにぎり以外食べられないの。食べたくないの。だからおばさんのおにぎりは食べない。でもおにぎりは持ってる。自分のやったことに後悔ばかりしないで。私がどうなろうと受け止めて。」

そんなこと言ったって...

「そんな風に振り返ってばかりいても、私は私のやりたいようにしかやらない。おばさんの行動は覆らない。この数日、おにぎりをあげる前の私に出会った事がある？」

ないね。

「でしょ？でも前を向いたら...。」女の子に促され前を向く。

すると次の電柱の下には私の家のいぬたろうがしっぽを振ってニコニコしている。

「おばさんのおにぎりが食べたくて仕方ない子がいるでしょ？気づいてよ。後悔ばかりを引きずらないで。思ったような結果にならなかったときでも。後味が悪い思いだけをしたとしても。私、おばさんに受けた大きなお世話、親切は忘れない。行動を起こしてくれなければ、私おばさんの夢に出てくることすらなかったはずだから。」

いぬたろうがわふうとないた。いぬたろうにおにぎりをあげた。大喜びで数秒でたいらげてぺろりと舌を出し、私を見上げている。

女の子の方を振り返ったがやはりもうそこにはいなかった。

ラップにくるまれた干飯がコロコロと足元に転がってくる。風が犬と私の上っ面をなでていく。

翌日の夢から、その子が出てくることはなかった。

私の人生の9割近くは恥と後悔の日々のように思える。

それくらい後ろ向きの生き方。何度も前を向こうと試みるも小さなことでくじけ、グジグジ後悔をして後ろを向いてしまう。その繰り返し。時間は容赦なく流れ、後ろ向きでエスカレーターに乗っているような私を、有無を言わず人生の終焉に運んでいる。そんなイメージ。

エスカレーターの下に流れる、もう戻れないイベント会場を遠目で見ているんだろう。

そろそろ、どこの階にたどりつくか前を見ておかないと、勢いよく転んでけがでもするんだろうからなあ。



あの子は階下から私に一喝入れるつもりだったんだろうね。

そろそろ、次の階にたどりつく頃かもしれない。

次はどんなイベントがあるんだろう。

## 結婚式は何度でも

---

私の本当の結婚式は、教会ではなく、結婚式場に備え付けられたなんちゃって神殿の中で「アホ姫」「バカ殿様」のようなコスプレ風になってしまっていたが、夢の中の私は狭くて古い教会で、神父さんの前に立っている。ひょう〇ん族の懺悔の部屋のセットみたいだった。神父さんは額の広いごく普通の、どこにでもいそうなおじさん。相手は誰だろうと思い、横をちらりとみた。残念なことに今のダンナだった。

「よき時も悪き時も 富める時も貧しいときも・・・。」

そんな感じで神父さんが宣誓の言葉を話している。私はなんとなくぼんやりとしながら聞いていた。神父さんが宣誓の言葉を言い終わった。ここで「誓いますか？」とまずはダンナに尋ねてきた。

ところがヤツは。

「どーしよーかな。正直ぴんと来ないんだよね」

などと言いやがった。

「そりゃあ誰だって、いい時はいいんだよな。でも、俺正直自信ないや。病気とかになって、家事ができなくなったらイライラして怒鳴るかも。俺家ではできるだけ動かないでゴロゴロしてたいし。毎日おいしいもの食べたいし、きれいなところにいたいけれど、家事の手伝いなんてできっこないよ。」

私は、あなたが数回の失業を経験したときには、何やっているんだと怒鳴ってしまったね。あなたが失業中、ひとりで家事とパートのかけもちをしていたときには、本当にあなたと結婚をしたことを悩んだ。自分が、自分だけが正しくて一番不幸だと思い続けていた。なぜあなたが作った借金を私が支払わなければならないのか、と。

「共に歩むことはあるけれども、共に悪いことすることもあるかもしれない。他のきれいな女のひとと話をするのは、やっぱり嬉しくてやめられないし。あわよくば、なんて事も思わないとは言い切れない。今思っている気持ちが愛なのかというと・・・。微妙だわ。まあねえ、こんな結構こっ恥ずかしいこと、クチに出したことないっすわ。一生思い続けるなんて、俺にできるだろうか、って。」

私もおんなじ。結婚を決めた頃の、浮かれているときにはわからないこと。「誓います」という言葉の重み。夫婦は甘い言葉やきれいごとには彩られるものではなく、もっと生々しい人間と人間のぶつかり合い。コップの置き場所やご飯の固さ、服の趣味、お金の価値観。色々なことが違いすぎて常に折り合いを探す。

「話さなくてもわかるでしょ？」と怠慢な気持ちを重ね、イライラを募らせる。自分の言葉は怠りがちになるくせに、「話さなければわからないよ？」と相手に対し横暴三昧なことをいう。子供がいる家族はまた、それなりの色々な試練がありそうだ。

神父さんは、自信なさげなダンナを苦笑いで見つめる。そして、穏やかに話し始めた。

「確かにそうかもしれませぬ。価値観が同じ人間なんてだれ一人として存在しないものですから。生活にはいろいろな困難が伴います。ましてやこの不安定なご時世。職を失う、病気を診

てもらふ病院もない、住む家もなく食べるものもない。奪い奪われる日々。これが常になっている場所がどんどん増えていきつつあります。悲しいことです。まあ、座りませんか？」

私とダンナは、一番前の固い木の椅子に座る。少し木がきしむ音がした。

「そりゃあね。私もここでこうして、誓いますか？なんて神の言葉を代弁するわけです。一応聖職者の一員ですから。しかし、神様がきいているのは、互いが困難を承知で、愛を育む関係になりたいと思ってますか？ということじゃないでしょうか。」

神父さんは祭壇のそばの演台から降りて、私たち夫婦の横に座った。

「私たちは過ちを犯してばかりいます。感情は常に乱れます。しかしそれでも、いつかは互いに素敵な関係を築きたい、自分以外の誰かとして選んだ、目の前にいるその人と心を通いあわせたい、と...。」

しばらくの沈黙があった。

「もしそう思っていらっしゃるのなら、誓います、といってもいいんですよ。」

神父さんが笑った。

ダンナは「それなら誓います」と言ってくれた。私も「誓います」ということができた。

「互いの関係を確かめ合うという意味で、結婚式をやるのなら、どこで何度やってもいいですよ。相手との関係を何度も振り返ってください。一本の時間軸の途中、唯一無二の、一度きりの人生です。結婚関係を維持することが無理そうだったら話し合う、賢明さをお互いに持ち続けてください。」

聖書っぽい本は音をたてて閉じられた。神父さんは笑顔で

「どうか、またお越しく下さいね。」と言ってくれた。

私たちは軽くうなづいてまたお互いの日常に戻っていく。

## 消化不良

---

ザクロの実を食べている。クチの中に粒がたまるが飲み込むことができない。

飲み込めないものは要らないのだ。ザクロを置いた。

すると、黒い服の怖い顔の人が出てきて言う。

「なんじゃおどれは。喰いかけたものは最後まで喰えばいいんじゃ」

ザクロの粒を私の口に押し込む。私は飲み込めばいいのにザクロを飲み込むことができない。逃げようとすればこわもて仲間が押さえつける。ザクロをドンドン放りこんでくる。しまいにはザクロを包むラップや、その他色々な食べられるかどうかわからないようなものを放りこんでくるんだ。

お前らそんなんしてたらしまいにははいてやるぞ。ウゲウゲ吐いてやるぜ。そういうフェイントを見せるために、グエグエいつてみた。すると、

「な、ここではくのは辞めろきたねーから」黒服達が手を一瞬手を離した。

そのすきを見て必死で逃げた。ビルの陰のゴミ捨て場の裏まで逃げた。私はそこでクチの中の物を全部吐きだそうと思った。するとゴミ捨て場にいたかわいらしい子猫達が

「ココではくなく、きたねーからウゲウゲ」という。

仕方ないからコンビニのトイレに行った。そこでありったけ吐こうと思った。するとトイレに張り紙がしてある。

「吐くな」

そんな事かまってられませんわ緊急事態ですよ。なんで出すのが構わないのに吐くのはいかなのですか。無視してはこうとしたら、店員さんにドアを開けられる。

「いました！ここに」店員さんはさっきの黒服を案内してきた様子。

「なんじゃおどれは。まだ喰うとらんかったんか。いさぎよくない奴だ」

知らない知らない。無視してクチの中のものを出すつもりだったが、押さえつけられクチにガムテープを貼られる。

「飲み込んでしまえすべて飲み込んでしまえ」「一切合財飲み込んでしまえ飲み込め」

黒服だけではなく、コンビニの店員さん、ゴミ捨て場の子猫達、その他色々な人がわたしに飲み込むことを強要するのだ。

飲み込め 飲み込め 飲み込め。

私は強要に負けて飲み込んでしまう。飲み込んだ私は瞬間、お腹の中がいっぱいになり、身体が膨らみ今よりさらに太ってしまう。間髪いれずに黒服は色々なものを私のクチに入れていくのだ。

世の中の人たちはみなスリムで闊達に見える。

皆色々な物事をスマートに解決したり割り切ったり、他に委ねたり、あるいは棚上げして少しずつ片づける術を知っているようだ。うまくやり過ごす方法もよくわかっている様子。軽いつて快適ですか。幸せですか。重さがないってどんな感じですか。一度いつてみたいと思うのですが、なかなか難しいもんだ。

そういう風なことをひがみ丸出しでスリムな人につぶやいた。すると、実は私より何十倍の重力に耐えているにも関わらず、ふわりと軽々羽ばたいていたのを知ってしまったこともあった。清濁併せのみ貯めこむ器量もないくせに、たくさんの物を毎日飲み込まなければならぬ日々を過ごしている。この未消化分をどうにかしないと。

一旦、色々なものを棚上げしておく場所が欲しい。しかし私はそういう場所を探せずにいる。朝起きると、今日もそういう日々が続く事を感じてうんざりする。しかしこの世界で生きているうちは、この自分に課せられたGに耐え、あるいは未消化分を消化することに費やすことになるんだらうな。

空を見上げると軽々とふわりと雲が浮かぶ。

私の足は重力で地面につながっている。楽しいことがないわけじゃない。しかし自分自身が重い

。

## 一度汚れたらもう無理なのだろうか

---

私達夫婦は揃って大変な不祥事を起こしたらしい。

何やら怖い人外の人たちに囲まれている様子。暗闇の中なのでその形はわからないままだ。私達は両手を拘束され地に頬を付けられた。ダンナが横で何かに顔を踏まれて血を流す。暗闇の中から声が聞こえてきた。ダンナに質問をしたようだ。

「どうしても許してほしいと願うなら、お前の大事なものを一つ差し出せ。お前にとって、一番大事なものは何だ？」

ダンナは「命です。自分の命です！」と答えた。

暗闇からの声はさらにダンナに尋ねる。

「なら、そばにいる女の命は要らないな？」奴は二つ返事でyesといった。

ダンナは涙と鼻水が混ざったぐちゃぐちゃな顔で私に謝った。

「すまない、本当にすまなかったごめんなさい。でも死にたくない。怖い。痛いのも嫌だ。助かりたい。」

仕方のないことだと思った。私も一番自分がかわいい。

私は自分で生き伸びる。どんなふうになっても怨むことはしない。同じこと聞かれたら同じように答えたかもしれないから。先に問われたほうが正直に答えただけの話だろ。大丈夫だ。あなたを支持するよ。

暗闇の声が笑った。

「そうか。なら一番大事なものを差し出せ。お前自体の命がすべて全く、なかったことにしてやるぜ。お前の存在のすべてをな。」

ダンナの姿が消しゴムで消されたように消えてしまった。闇の中からまた複数の笑い声がした。

「命の一つくらいとってつまんねーな。平凡だが普遍的な答えだ。誰もがそう言うだろうよ。当たり前じゃん。お前のダンナつくづくシンプルアホウだな。」

人間の命を勝手になかったことにしておいて笑っているのだ。その行為のおぞましさや、非情さに歯が震えた。

「お前。」暗闇から声がかかった。今度は私に質問をしたらしい。

「もう命はひとつもらったからな。今度は別のものが欲しい。お前にとって一番大事なものは何だ。少し面白い回答をしるよ。言えないんなら俺らが指定したものをもらおう。」

つまらんクイズだ。命以外に大事なものなんてなんかあったか？夢とか希望、誇りとか尊厳とか、そういう崇高で抽象的な難しいことを言えばいいのか。親とか兄弟とか、自分以外の命のありがたさについて言えばいいのか。私は答えることはできなかった。暗闇からまた笑い声がる。

「そんなことだろーと思っただぜ。お前きっと欲張りだから迷って何にも決めないで、頭の中で屁理屈ごねてんだろ？見え透いているんだよ。時間かかるくらいならこっちが指定した事をやれや。」

目の前にはポータブルトイレのバケツの中に多量の汚水が溜まっている。そして泥水がコップに

1杯。

「そのバケツの水をかぶって、泥水1杯飲めよ。そしたら解放してやる。」

かなり躊躇した。しかし助かりたくて私はバケツの水をかぶって泥水を飲んだ。

泥水を飲みほした瞬間。私の周囲の暗闇は普段の風景に戻った。

私は風呂に入りたくて家の中に入ろうとするが、

「汚いものがはいるんじゃない」

舅さん夫婦やダンナに塩をぶつけられ入れてもらえない。洗えば落ちるんだ。なんでそんなに嫌うんだ。

「いくら助かるためとは言っても、そんなに汚いものをかぶるなんてありえない。100年の恋もこれで覚める。泥水を啜ったクチに二度とキスはしたくない」

ダンナはそういった。飼い犬に近づいていって見た。汚い臭い私は犬にも認識されず吠えたり続けられる。川に行き身体を洗おうとすれば、川下に汚いものが流れるのをよしとしない人たちが、ココロない罵声を浴びせ石を投げつける。猟銃で威嚇射撃も始まった。私は汚れたまま町を歩く。皆が避けて通り石を投げつけ、言葉で刺し貫く。行く先々で蔑まれ存在自体を否定され続ける。

洗えば落ちるんだ。なんでこんな扱いを受けるんだ。洗わせてくれ、体に染みつきそうなこの汚れを洗わせてくれたら、元の私に戻れるだろうに。

その時、目の前が再び暗闇に覆われる。

「一度汚れたものは二度と綺麗なものには戻れない。たとえ洗い流したとしても、汚れた事実は消えない。便所洗った歯ブラシを消毒したってそれを自分の歯ブラシにしようとは思わないだろ？そういうことだ。汚れるというのはそういうことだ。お前は二度と、清潔には戻れない。泥水までくたって身体の中まで汚れきったお前を、おいてくれる所などない。」

わかるだろ？暗闇からの声はげらげら笑いながら言った。

「とりあえず、お前の大事にしている自分ってやつをもらった。こんなに面白いとは思わなかった。命もらうより面白いぜ。じゃあな。一生汚物まみれで暮らせ。汚いお前」

夢から覚めた時には寒々とした気持ちに包まれていた。

私が奪われたのは命ではなくて「今まで形作っていた自分自身」だったようだ。

汚れたままで洗い落とせず徘徊していく時間が長いほど、洗い落とすのが困難になる泥水や異臭のような、生活の悪習慣。それを喰らわなければ生きていけない弱々しい存在の自分。戻りたいと願っても叶わず、新しい場所も見つからない。汚れていなかった頃の自分を基準にして考えてしまいがちで、今を受け入れられない。

綺麗になったとしても、二度と元のように扱われないことは知っている。

しかしどうにかして洗い落としたいと願い、洗う場所を求めてさまよっている。

一度汚れたらもう無理なのだろうか。誰ももう私を受け入れてはくれないのだろうか。

## 殺しあうのもあなたと

---

それはとても恐ろしい寄生生物らしい。

その生物に寄生されると、一番最初に触った生き物と戦わなければ生きていけない身体になってしまうという。負けたらそのまま死ぬ。戦って勝てば生き残る。しかし寄生生物が体内から出ていくことはない。駆除方法は宿主が死ぬ以外に発見されておらず、もし宿主が死亡するような事があれば、灰からも寄生される可能性があるため、その灰は嚴重にどこかの保管施設に保護されることになり、墓の中に入ることはない。宿主は宿主同士のコミュニティに強制的に収容され互いに触れることもなく死を待つのみとのこと。

私とダンナがいる場所で、なぜかその恐ろしい生き物の宿主が出て暴れだしている様子だ。

そして私に戦いを挑みにきた。ダンナが「逃げて逃げて」と大声で叫んでいたのが聞こえた。私も必死で逃げたがどうやら逃げ場を失ってしまった。そしてとうとう、その宿主は私に触れた。負ければ殺される。心配で何か意味不明の声をあげていたダンナに対して、

「勝ちゃーいいんだよ勝ちゃー」と男前なコメントを残し必死で生き物に寄生された人と戦う。わたしはその人に勝って生き残った。倒された人の顔がなんだかほっとしていたのが若干気になっていた。

戦いが終わってふと周りを見ると、私の周囲にいた人々が私を避けて逃げ惑う。そうか。私は寄生されたんだ。誰も戦いの標的になりたくないし誰も、誰かを傷つけるような事はしたくないわけだ。遠くからダンナは叫んでいた。

「なんで勝ったんだよ。勝ったら寄生されてしまうじゃないか。」

「なに言ってんだよ。生きてりゃいいだろ。勝たなきゃ死ぬんだぜ」

「ダメだよ。もう俺はあなたに触ることができないじゃないか。」

そうだ。一番最初に触った人間と戦わなきゃいけないんだったな。

で、勝ったら宿主、負けたら死亡。人殺し確定だったな。

この時点で、私は誰に触ることもできず孤独に暮らす事が決定したってことだ。大変なことになってしまった。人としてもう終わっちゃったような感じだな。人に触らず生きる事は苦しいだろうな。それが永劫続くんだぜ。さっきの宿主は誰かに触りたくて収容所以外の世界に出てきたのかもしれない。そして私を見つけて触った。

人に触れられた安堵は一瞬。後は命がけの攻防。勝てば殺人の罪悪を更に背負い人に触れられない孤独を継続して生き続ける。負ければ命は終わるが、物質の世から離れられたら、生き物に触れられない寂寞も終わるって事だ。

ああそういうことだ。

「そういうことだ」

ダンナは悲しそうだった。私は精一杯の強がりと感謝でこんな変なコメントしか出せなくなっていた

「というわけだ。さよならだな。緑の紙を使わず仲良しでいられたことが嬉しい」

すると、私から遠ざかると思われた彼が逆に私に近寄ってくる。なにやってるんだあんたは。



「触ってよ。俺に。」

バカだろ。触ったらあんたに感染するんだよ。そして私達は愛し合わずに殺しあう間柄になるんだ。

「でも触ってられる。俺たちなら、殺しあってもうまくやっていける」

言っている意味がわからないよ。

「人に触られず人ではなくなるあなたを見ているだけより、あなたにふれて死にたいと思うんだ。あなたに殺されるならいいし、もし俺があなたを殺してしまったら、その苦しみをずっと背負って収容所にいようと思う。まああなたがいなくて淋しい俺が何年生きられるかわからないけど。男は寿命が短いでしょ。そんなに待たないで済むと思う。だから、触ってくれよ。タダの夫婦としての俺達の最後の握手だ」

迷っていた。しかし彼は私が一番好きな笑顔をしている。

この人がこういう風に笑えるときには根拠のない自信があるとき。9割くらい失敗している。けれど失敗の後には精一杯で笑えているし、1割の成功の時には本当に嬉しい気持ちを共有できる。

「さ、早く」

彼の笑顔が涙になる前に、私は手を握る。

私達は殺し合いながら日常を過ごし続けて朝を待っている。

## バラ園の美女

---

様々な種類のバラが咲き乱れている庭園。庭園の真ん中にはアンティークな布張りのソファが置いてあった。そのそばにはローズウッドでできたテーブルがある。テーブルには真っ白なティーカップとポット。紅茶が入っているようだ。土の香りの上にバラの香りがある、その上を紅茶の香りがふわりと漂っていた。時間の流れまでゆったりとしている気がした。

ソファに座っていたのは褐色の肌の美女だった。生成りのさっぱりとした印象のデザインワンピースが似合っていた。羽織ったボレロは、バラのように艶めいた緋色。ボレロの上の漆黒で癖のある艶髪が、微風に薫って揺れた。何かの映画を見ているような風景だと思った。

美女はどこまでも高く青い空を見上げて言う。

「あなた、このバラ園から外に出たことがある？」

バラ園に入ったことは初めてですし、あなたに会うのも初めてですよ。

「ねえ。このバラ園の外には何があるの？」

そうですねえ……。

バラ園の外は、ココのようにいい香りがするものはごく稀だと思うんですよ。いろんな匂いが鼻を刺激しますわ。時間の流れも違うだろう。何より、ココよりもいろいろなものがとにかくたくさん、あるんです。百聞は一見に、って言葉があるんです。一度ココから出てみると色々実際見ることができますよ。

「私はここから出ることができないの。」

美女は淋しそうに微笑んだ。美女は足首に鎖をつけられている。鎖の先には大きな錘が付いていた。彼女の細い足首に、鉄の輪が噛み付いていた。足首が折れそうに見えた。

「ねえ。私と一緒に、ずっとここにいてくれる？」

美女は潤んだ瞳で私を見つめた。彼女のはかなげな印象や寂しさが、一瞬で私に押し寄せてくる気がした。私はその寂寞に耐えられず「一緒にいるよ」とうなずきかけた。しかし、彼女はすぐにまた優しく笑って私に言った。

「なんてね、冗談よ。今日はあなたとお話できてよかった。さ、今のうちに早く行って。まっすぐ行ったら抜けることができるはず。」

私は美女を置いて庭園を出て行く。一度だけ、振り返った。彼女は私に向かって笑顔で手を振った。

空は高く、青く澄んでいた。

バラ園を抜けると砂漠があった。私は、人骨が散らばる砂漠を歩く。

砂交じりの風に吹かれて、空を見上げる余裕もなく。鼻に入った砂で空気を味わうこともないまま、ただ必死になって砂漠を歩く。時々、鎖につながれた彼女を想い、切ない気持ちになった。

砂漠はいつか終わる。そしたら私が知っている日常にたどり着くかもしれない。しかし彼女のバラ園は永遠にあるように見えた。永遠というのは、恒久に、幾久しく同じ情景が続くということ。彼女の鎖につながれた優雅な牢獄生活も永遠であろうということだ。彼女は外の世界をみ

ることはない。

もう一度だけ、後ろを振り返る。しかしそこにバラ園は見えない。

## ゆめくいさんの話

---

その生き物の名前はゆめくいさんという。

紫色の和紙をまるくぼんやりと手で切ったような、柔らかく愛でたくなるような手触りに、低い声のオヤジ喋り。ゆめくいは私の中に住んでいる、といていた。面白い生き物だった。ただ広だけの白い部屋にいた。部屋の中には、和紙をちぎったような質感の丸いものが転がっている。大小さまざまで、淡くて色とりどりの丸いもの。どれひとつとして同じ色はない。

そのかわいらしく散らかったイメージの部屋の真ん中に、特別大きなまるいものが転がっていた。それがゆめくいさんだった。私を見たたん、「ようきたね」と低い声で言った。

「おれはゆめくい。自己紹介後早速やけど、用件だけ取り急ぎ。」

自己紹介をした丸いものは、私の前にふわふわと転がるような、飛ぶような感じで近づいて言った。

「あのなあ、もう少しうまいもの喰わしてくれへんかな」

何を言っているのかよくわからなかった。キョトンとする私を見てゆめくいさんも

「まあ、急に何をいってもわからへんよね。」と言って鼻で少しわらった。

「キミと僕の周り。今、いろんな大きさの丸いものが、転がってるでしょ？色も何一つ同じものってないよね。あれはね。キミの中で育っている夢の形なんよ。で、僕はソレを食べさせてもらっているから、君の中で生きていける。」

ゆめくいは頭を振った。

「キミにはな、毎日大小たくさんの夢が生まれているんよ。大体の夢は生まれては消える泡みたいなもんや。で、消えずにある程度そだった夢を僕らが食べることで、初めてその夢は成立していく、というか叶っていくんよね」

だったら片っ端から食ってくれ。幸せになりたいわ私も。

そういうと、ゆめくいは乾いた笑いの後言った。

「それがそうもいかんのだよ。未熟な夢をかじるってのは、俺らにとっては青梅を大量丸かじりするようなもん。毒があるんよ。毒になる夢を大量に食ったら、僕も生きてられなくなる。僕が夢を食べられなくなったときは、君の命もおわるやろな。夢がない人間、って生きていくのはつまらんやろうな。」

それはこまるわ。そういうと、ゆめくいは笑って、「そうやな」とだけ言った。

ふと遠くを見ると、灰色のフェルトのような色の、飛びきり大きな丸が見える。

「あの灰色の大きなヤツは、つい先日まで、キミが暖めていた夢。あの国家資格試験を取得して、病院勤めるのが夢やったのよな。あの夢はゴージャスで、大きさがあってステキやったな。どんな風に熟れていくのが楽しみや、そう思って毎日毎日夢を喰らうタイミングを待ってたけど腐ってもうたわ。無理やり食おうと思ったらすっぱくて食われへんかった。」

ああソレは確かに。あの夢は面白かった。でも、もうあきらめたんだ。少ししょっぱい気分になる。その空気をよんでみたのか、ゆめくいが快活な口調で、

「でもな、夢はただでは消えないんよ。あの灰色の夢のまわりをみてる？」

その灰色の丸いカタマリのあちらこちらから、細いあさがおのつるのようなものが出てきて周囲の色つきの、いろいろな色の丸につながっていたんだ。

「一度本気で追いかけた夢ってな、あちこちに枝葉を出してエッセンスをほかの夢に供給していくんよ。だからやめたくらいじゃダメにはならない。古くなった夢は、新しい夢の糧になるんやで。だから夢を持つことは、かなえられないものだとしても、決して無駄じゃない。」

はじめの就職先でも、半端な仕事をして国家試験を落ち続けた。結婚という理由で離職して逃げていた。自分のことを好きになれず、新しい夢に対しても半端な努力しかできていない。日ごろの情けない自分が脳裏をよぎる。

「そういうこっちゃん。もう少しがんばってくれな。オレも空腹に耐えかねて、妙なものを無理に食わないように気をつけるつもりや。」

ゆめくいが言った。

「あのな、夢が熟れる条件っていうんがあるねん。いい土地、定期的なメンテ、そして熟れた時期を逃さないタイミングで収穫。コレよ。オレが住んでいるってことはそれだけで、夢をかなえる素地があるってことで、上等だといえるわな。あとは、メンテナンスしてこの夢をどんどん育てろよ。そしたらオレは、タイミングよく食べて夢をかなえるように、実を観察して待ってる。」

そして少しだけ、静かな口調で

「大丈夫やと思う。キミの中にはとりあえず、こんなにたくさんの未熟な夢の実があるんや。まだ平気やで。だから、もっとがんばれ。オレも必死に、キミの夢が叶うように喰らいついていくで。な？」

ゆめくいの後ろから朝日が追いかけてきた。

ゆめくいさんにはあれからしばらく会っていない。

もう38になっちゃった。まだ私の中に住んでいてくれているのだろうか。お腹をすかして可愛い顔をして私の事をまだ信じてくれているのだろうか。まだおいしい夢を食べさせてあげることができないでいる心がない私を許してほしい。でも、あきらめないでもう少し待っていてくれると助かるんだが。

## 白い砂漠をはるばると

---

真っ白な砂でできた、灰色の空の砂漠。私は何か重い荷物を背負って歩いていた。どこに行くのか、あてがあるわけでもなかった。とにかく歩いて、目の前の砂山の数々を越えるために懸命になっていた。年齢性别人種、多種多様な人々が、この白い砂漠を越えようとしているのがみえる。

気になるのが、全ての人が、何か必ず背負っていることだった。大きさの様々な荷物。リュックに入れて背負ったりダンボールを抱えたり、エコバックに入れたり、おしゃれバッグに入れたりして。小さな荷物を背負っているにもかかわらず苦しそうな表情の人もある。大きな荷物を軽々楽しそうに背負いあげる、ご年輩の方の姿もある。両手に背中に、荷物を抱えて汗だくになっている若い女性の姿もある。荷物の重さに耐え切れず、砂の上に座り込んでいる若い男性の姿も見えた。

私たちが苦しめられている白い砂漠。その先には何があるのだろうか。私たちはどうしてこんなことをしているのだろうか。よく分からない。しかし進まずにはいられない気がする。強い向かい風が吹いた。白砂の粒を含んだ風が私たちに打ち付けられる。痛くて目を開けられないほどの砂嵐。

砂嵐の後。目の前を歩いていた中年男性が、自分の背中の、とにかくとてつもなく大きな荷物を、ためらいがちに、しかし一瞬だけほっとした表情をして、ゆっくりと降ろした。すると、その男性の足元に巨大な砂の渦巻きが現れて、彼を飲み込んでいく。彼は苦しそうに叫びながら、砂の中に埋もれていった。砂は男性を飲み込むと、また元に戻った。砂の渦巻きの後には、男性の背負っていた荷物だけがポツリと残されている。

男性が置いていった荷物はやがてクチをあけた。荷物の中からどす黒い煙が出てきて、他の人の荷物の上にかかる。すると周囲の人々は苦しげな息を漏らす。煙は私の荷物にもかかってきた。煙が当たると荷物は少し重くなった。何だよ、いいとばっちりだな。おじさん荷物放り出してどこいったんだよ。

後ろから「あんた、重いだろうけど辞めちゃいけないよ。」と、私に話しかける人がいた。振り返ると、見ず知らずの年輩の女性だった。女性もとにかく多くの荷物を抱えて苦しそうにしている。

「荷物を降ろすと飲み込まれてしまうんだからね。飲まれてたまるもんか、あたしたちは砂漠を抜けるんだって、強い意志をもちなさい。しっかりしなよ。」

女性は、私が首からぶら下げていた水筒に、自分の水筒から水を少し分けてくれた。

「アンタも困った人がいたら、水を分けてやるんだよ。困ったり疲れたら、水を飲んでまたがんばらなきゃダメだよ」

そうやってたくましく歩いていった。私は後姿をぼんやりと見つめて見送った。

お礼を言うのを忘れたなあと思いながら、水筒のふたをあけて覗き込んだ。中にはきれいな水がたまっているのが分かった。飲めばまた元気になれるような気がした。

## 小船の船長さん

---

大海で小船に揺られている私。ひとりで深海から鎖を巻き上げる作業をしていた。巻いても巻いても、鎖が途切れることはなかった。とにかく巻き取り続けていたら、船が重量オーバーで沈みそうになる。私は水をかきだしながら、その作業を続けていたが、とうとう限界が来たようだ。巻くのも引くのも無理になった。船も水面近くまで沈んでいる。冷たそうなこの海に小船と共に沈むのか、と思ったそのとき。

空から光が降ってきて、

「ごくろうさん。とりあえず一緒に来るかい？」といわれた。

「ぜひ」と答えた。私はUFOが地球人を誘拐するときのイメージ漫画みたいに小船もろとも光に吸い上げられていったのだった。

吸い上げられた先には同じような小船が多く停泊していて、制服を着た係員みたいな人が鎖と船の点検をしていた。私の船にも2人組の係員さんがやってきた。年輩の係員がメモを取りながら、老眼鏡をかけなおし申し訳なさそうに言う。

「うーんと。がんばってもらったのは分かったんだけども。アンタが前から抱えている負債分と、今回引き上げてくれた鎖の分と。あわせて計算してみたんだけどもね。今回もやっぱり負債繰越分がありますわ。」

はぁ……。何か分からないけど負債ってのは悲しいもんですね。

「そうだよ。でも誰でも持ってくるものなのよ。大体の人が、あなたみたいな結果になるのよ。心配しなさんな。まあね、希望を捨てないでまたいつてきてくださいよ。最近負債を抱える人が多くて、過ぎしにくくはなっているでしょうが、それだけね、あの、やる気のある人にとっては早く回収もできるわけです。」

もう一人の若い係員は私の船に何かステッカーを貼りきびきびした声で「チェック終わりました」と言った。「では」年輩の係員は軽くお辞儀をした。若い係員が私に言った。

「船は無償で修理させていただきます。修理には若干時間がかかりますが、どこにいかが必ずお呼びさせていただきます。あ、食堂では無事に帰ってきた人たちが集まって、心ばかりの宴会をしているようですよ。よかったら参加されてみませんか？食堂はこの道まっすぐいくとすぐです。では失礼します。」

彼は深く元気のよいお辞儀をした。なんだか知らないけれど。宴会はいいですな宴会は。

教えてもらった道を行ったら、食堂というか、居酒屋があった。そこでは老若男女が思い思いに、楽しげに杯を酌み交わしている。喧騒に包まれていたが穏やかな空間で、みんなニコニコしていた。私もいつの間にか色々な人たちと仲良くなり、和やかにおいしいものを食べて、いいお酒を飲んだ。

何でこんなところにたどり着いたのか忘れるほどに、とにかく楽しんでた矢先。先ほどの係員と同じような制服を着た人が、どこからともなく現れて、私と特に楽しく会話をしていた年輩の

女性のそばに立ち「お時間です」といった。すると彼女は「分かりました」とさっと席を立った。

「今度はどんなカタチで出会えるのかはわからないけれども、私はまた皆さんと出会える気がするの。そしてまた、仲良くなれるわ。そんな気がする。その日まで皆さんお元気で。」

彼女はさわやかに笑った。私たちも「いってらっしゃい」と明るく見送る。彼女と入れ違いに、また別の人が相席をしてくる。しばらくするとまた誰かが呼ばれて去っていく。そんな光景を何度か繰り返した。そして私のそばにも係員が立ち「お時間です」と告げた。

その瞬間。私はあの孤独な大海で、ひとりで黙々と、鎖を巻いていたときのことを思い出した。広い海の中に埋まっているいつ切れるとも分からない鎖。がんばって回収するほど、自分自身の船の重みを増すことになり、苦しい思いをするのだ。そんなことをするよりはここにずっと座っていたい。

「あの・・・。順番譲るんで、ココに残ることはできないんですか？」

私は腰抜けな事を聞いてしまう。係員は申し訳なさそうに言う。

「それはいたしかねます。順番は不動普遍なものなんです。確かにあの作業は重労働で辛いでしょうが、耐えてもらわなきゃならないんですよ。」

するとそばで酒を飲んでいた皆が、口々に私を励ましてくれる。

「俺らもすぐに行くから。ひとりじゃないからグズグズしないで行けよ」

「ああ。俺らは絶対出会えるさ。」「広い海でも間違いなく、俺たちは出会える。」

「出会うまでがんばって仕事してなきゃだめだぞ。やめんじゃねえぞ」

私の後ろの席でも同じように駄々をこねている人がいたのだ。もう船に乗るのはたくさんだ、と怒鳴っていたね。係員がとにかく困った顔をしていた。私についている係員も少し困った顔をしていた。なんだか駄々をこねるのはみっともないね。仕方ないわ。また海に戻ることにしよう。

「駄々こねてすみませんでした。いきますわ。じゃ。」

私は係員の後についていった。後ろからは皆の声援や喧騒が聞こえていた。それも少しずつ遠くなっていった。私と係員は船着場に向かって歩いている。

「やっぱり、離れるのはお辛いでしょうけれど、皆さんやはり負債からは逃れることができないんですよ。」

そうでしょうね。借金でも何でも。借りたら返すのは当然ですから。しかし、私はいったい誰に何を借りて負債義務を負ったのでしょうか。それがいまいちわからないですよ。なんで、私はこんな辛い思いをして・・・。

「船に乗るのか、とおっしゃりたいのですね。」

係員は相変わらず振り返らない。あくまでも事務的に淡々と話す。

「あなたが乗る船は小さいです。しかしあなた以外に乗ることは許されません。そして、あなたが巻き取るべき鎖も、あなた以外には見つけることすらできません。自分の鎖すら見つけられずに勘違いして、別の鎖を巻き取ろうとしてみたり、重くて辛いからと、鎖を自分で断ち切ることに労力を割く人もいます。あれは関心しませんね。自分自身の負債を増やすことにつながる上に



、他者の妨げになる。」

係員は自分の肩をトントンたたきながら歩いていく。目の前には小さな小船が見えてきた。

「しかし、断ち切ろうが何をしようが、あなたは海に出て行くことを止められないのです。あなたが鎖を巻き取らなければならない理由も、正しい鎖を引き当てていけばきっと見えてくるはず。ですから、私が言うべきことではありません。」

係員は小船を手繰り寄せて私に乗るように促した。これ……。小船っつーかスワンボートに限りなく近いよ。前のボートとはえらい違いだぜ、こんなんでもうやって海で暮らせてのさ。

「大丈夫です。今回のあなたのボートに間違いありません。さ、乗って」

あほか、隣の船はあんなにでかくて丈夫そうじゃねーか。なんでこんなにえこひいきなんだここは。

「きまりですから！さ、お乗りください」

係員は強引に私をボートに乗せて出発させた。

「いってらっしゃいませ」と係員は波止場から手を振っている。

私は数回、係員のほうを振り返りつつも、スワンボートをキコキコ漕いで、大海へ向かい飛び出していく。

近所の川でライフジャケットを着て、犬と一緒に川の流りに身を委ねて流されている。とにかくとても気持ちがよかった。犬もうれしそうな顔をして、わふわふクチを開けている。空は穏やかに晴れている。魚が時々、足の間を泳いでいるのがわかった。川岸ではバーベキューなんかしている親子連れや、川釣りを楽しむ人なんかが見えた。そうだ、この川は鮎やヤマメが棲む清流なものな。

時々スイカや浮き袋、ゴミなんかに追いつかれたりもするけれど、まあ順調にぼやぼやと流されていた。そして、汽水域に到着。川幅が大きくなって潮の匂いがしてきた。

私より少し先を流されていた犬が、私のほうを振りかえってきた。

「これでいいのですか？」 そういっているような、すぎるような少し不安な瞳。

海は広いから怖いよなあ。塩水だし。私と犬は川の真ん中の三角州で少し一休みすることにした。犬を抱いて、今来た流れと、これから出ていくであろう海を見ながら考える。これでいいのかなあ。つつーか、いいのよ、なあ……。迷い始めた私。

時間はどんどん過ぎていくようで、潮が少しずつ満ちていき、川の水位も上がっていく。三角州の面積は少なくなっていく。結論を早く出さなければならないようだ。というより、もう待ったなしで海に出ていくタイミングなのだろうな。もうあまり余裕はないみたい。焦るような怖いような。不安な気持ちであらためて、海の向こうと、今来た川をもう一度眺めた。

仕方ない。そろそろまた流されましようか。犬と一緒にもう一度川に浸かる。

一人でいるのは淋しかったので、運命が私たちが分かつまでは、とりあえず一緒にいてはくれないか犬、と犬に聴いて頭をもう一度なでてみた。仕方ねーな。おくれんじゃねーぞ。犬がつぶやいた気がした。私たちは海の向こうへ、ゆっくりと流されていく。

途中でお互い、沈みゆくことはわかりきっている。私たちは広く深い海に、これから流されていくんだし、目的地なんて決まっていはいない。思ったところに流れ着くわけがない。それでも流れに身を委ねる以外に道はないのなら、その流れの中を、できる範囲で楽しく流れていきたいじゃないよ。

時々出会う同じような流され人と、ぶつかりあったり挨拶したりしながら、とりあえず浮いていけるところまで。

不安と期待半分で、空を見上げたら、宵の明星が見え始めていた。

海の水は冷えている。犬と私は暖めあいながら、流されている。